

## 学会の一層の発展を願って

工学院大学名誉教授 矢部 眞

最近この雑誌（学会誌）がより読みやすくなったように思われる。関係者のご努力を多としたい。

本平成6年4月22日の総会で会員増強の提案があった。僭越とは思ったが私見を申し上げた。また、10月9日の秋の大会で、“皆でやろう、OR”という題で日頃考えていることを発表した。

学会誌を中心として希望することを述べてみたい。

### 1) 学会誌は第1に、会員の学位取得に役立つこと。

学会発足前に、推進に努力されている方に学会創設の意義について、率直にうかがったことがあった。お答は2つあり、第1が学位取得が可能になる、第2は企業の経営がカンやコツを排除して合理的にやれるようになる、というのだった。

第1については国鉄で学位を取得すると早く退職する例を見ていたので魅力を感じなかった。第2については、日科技連のOR教育コース受講の直後であり、カンをリファイン（洗練）するという印象を受けていたのでその旨申し上げた。“実はそうだ”とお答で、いわゆるセールス・トークに近かったのではあるまいか。当時本当に必要だったのか。

後年、大学教授になろうとしたとき学位のことがわかった。条件の1つとして、本論文のもととなるレフェリーつきの論文が複数あるというのがある。学会発足時から欧文誌と和文誌の2本建てとし、欧文誌が特にレフェリーつきとされた理由がこのとき初めてわかった。関係者のご努力で後年和文誌でもケース・スタディについて同様の扱いとなったことは喜ばしい。この関連事項がいくつかある。

オリジナリティの件だが、真理追求を主とする理学と応用を主とする工学との差がある。工学博士の場合には産業に寄与する内容が求められる。一方わが国では理論（実はアイデア）を応用より重しとする考えがある。

固有技術の学会等なら試作してハッキリさせられるが、ソフトウェア中心のORでは“学会活動で自社をPRせよ”といわれても、独占、半独占でない限り難しいのでは？ オリジナリティについてレフェリーが悩まれる場合が多かろう。同一業種、同一問題、同一手法の実例がそれである。実際は少ないと思うが、採択したあとでの反論を心配するあまり、参考文献などを判断基準とする

こともあろう。また、論文の形式というのがある。問題、経過、結論という順だが、企業では問題、結論、経過でないと話にならない。第一、企業人（研究所の場合は別？）にとっては大学人が満足するような論文が書けない方が普通だろう。一方、落とそうと思えばケチはいくらでもつけられる。

レフェリーに望みたいことは、多忙ではあろうが投稿論文がパスできるようにできる限り指導してもらいたい。実は最近になってすでに実行している方があると知って嬉しく思い、学会を見直した次第である。

### 2) 読みやすいこと

一般誌ではないから専門用語が入るのは止むを得ない。しかし、依頼原稿でも学会誌となると緊張されるせいか難しい書き方の例が見られる。

学位取得のためのケース・スタディの執筆者についての注意：学者は知識は豊富だが企業などの実務については明るくないのが普通である。したがって、問題の設定や前提条件等は、素人でもわかるような説明が必要。文献調査も不要とは言わないが、どう考えて実行しその結果はどうだったかの方がより重要である。

筆者のささやかな経験からすると、どうしてこんなことに気づかなかったのか、当たり前のことではないか！と思うことが多い。ORの本質はそこだと考える。本来真理というものは誰にでもわかるものだ。

なお、成果の可否は、“科学とは失敗の歴史”（寺田寅彦）からすれば2の次といってよい。応用した結果という事実が大切だから、といて失敗例を報告するにはかなりの勇気があることも事実。

### 3) 他誌には見られない情報が得られること

ORにはどんな問題にも適用される可能性を秘めている。だから対象を限ることはない。話題は多い方がよくケース・ヒストリーの形のほうが入りやすい。

### 4) 新手法の紹介とともに、初心者向けの基礎的手法についても毎回でなくても解説してもらいたい。

学会に加入してから学びたいという人もいよう。中小企業の法人会員向けには必要ではなからうか。

以上だが、筆者は先進国の一員となった今日、ORがますます必要だということを痛感している。

## 「読者の声」欄にご投稿を

ORやOR誌に関する意見・異見・アイデアなどをお寄せいただき、多少ともディスカッションの場が広がることをねらい、この欄を設けました。原稿の長さは、標準的には1000字程度、最大限2000字以内（刷り上がり1ページ）とします。ご投稿いただきました原稿の採否については、編集委員会で読ませていただいたうえでご連絡いたします。（機関誌編集委員会）